

現地の人，食文化との触れ合いを通して

24年度派遣 アグアスカリエンテス日本人学校
所沢市立伸栄小学校 教諭 田中 丈仁

はじめに

アグアスカリエンテス日本人学校は、メキシコ中部、標高約1600mにあるメキシコ最小の州である。高速道路以外には他州との行き来が出来づらいため、比較的治安も良く、日産自動車の工場をはじめとする、多くの日本企業が進出している。その日産自動車は私の赴任中に第2工場を建て、さらに第3工場を計画中という事もあり、それに伴って多くの日本人が渡墨している。

アグアスカリエンテス日本人学校も赴任当初は小中で50人程度の児童生徒数であったが、年々その数が増し、現在は100名を超す勢いである。しかし、日系企業に勤める保護者の、赴任期間中に在学する児童生徒が多いため、在籍期間は比較的短い児童生徒が多くを占めている。児童の中には、現地の幼稚園から入学した子、習い事などでメキシコの子どもたちと交流をしている子もいるが、多くの児童は日本人学校の友人同士の付き合いが中心の生活をしており、メキシコにしながら日本的な生活を送っているため、メキシコの文化や人に触れる機会が少ない。

太陽の国と言われるメキシコ。多くの世界遺産、伝統工芸、独特の食文化を生み出しているメキシコの人や文化に触れ、自分たちと比較しながら国際感覚を磨いてほしいと考え、以下のような取り組みを行った。

1 メキシコ人との触れ合いについて

～隣接する現地校（コレヒオ・フランセス・イダルゴ）との交流～

【1】担任した小学部2年児童の実態

2学年の児童7名のメキシコ滞在期間は、以下の通りである。

I（女子）メキシコ滞在期間 2年9ヶ月

現地の幼稚園に1年間通園。また近所に住む現地の女の子と自宅で遊ぶなどの交流を行っていた。

U（女子）メキシコ滞在期間 1年9ヶ月

E（男子）メキシコ滞在期間 4年5ヶ月

2年半、現地の幼稚園に通園している。また地元のサッカークラブに所属している。

K（男子）メキシコ滞在期間 3年5ヶ月

1年半、現地の幼稚園に通園している。また地元のサッカークラブに所属していた。

N（男子）メキシコ滞在期間 1年5ヶ月

H（女子）メキシコ滞在期間 1年5ヶ月

M（男子）メキシコ滞在期間 11ヶ月

学級で行った意識調査の結果

2年生がいただいているメキシコ人のイメージ（5月実施の自由記述より）

料理がおいしい。
よくあいさつをしてくれる
わからないことがあったら
何でも言ってくれる。
やさしい。
サッカーがうまい。
いつも掃除を頑張っている。
カッコいい人やかわいい人がいる。
おしゃれ

太っている。
道で手品をしたり、サーカスをしたりしている人がいる。
道路で物を売っている。
買うものが汚い。
バイクを3～4人乗りしている。
のんき。
コーラをいっぱい飲んでる。
よっぱらい。
かみの毛がくるくるしている。

メキシコの文化や習慣に興味がありますか	はい1	やや1	あまり1	いいえ4
メキシコ人に対して良いイメージをもっていますか	はい1	やや3	あまり1	いいえ2
メキシコの暮らしを楽しんでいますか	はい4	やや1	あまり1	いいえ1

週末など、車窓からうかがうことができる、路上で物を販売したり、芸を見せていたりしているメキシコ人の姿などから子どもたちが描いているイメージであると考えられる。実際に、メキシコの肥満率やコーラの消費量などは高い。また、幼稚園に通うなど、メキシコ人との関わり合いを多く経験した子どもたちの中にも「メキシコの子は夜になっても家にいて帰ってくれないから、いや。」など、日本人の常識との違いからマイナスイメージを抱いている傾向もあるようである。子どもたちの差別的発言も、上記のイメージが原因であるのではないかと考えられた。

私自身もメキシコに滞在し、児童と同じようなイメージを抱いていることも否定できない。メキシコの歴史や文化、おおらかな人柄に魅力を感じているだけではなく、メキシコを理解し尊重していく態度を身につけなければならない。

また、子どもたちには、主体的な関わり合いを通して、「違い」を「違い」として認識し受容していく態度、相互に共通している点を見つけていく態度を育成していく必要があると考えた。

【2】 交流のねらい

- ・交流を通して、メキシコで暮らす子どもたちを尊重し、子どもたちの進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を向上させる。

【3】 交流の内容

①交流対象

小学部1・2年によるフランス校の小学校1年生

②交流の概要

ペア、もしくは小グループで互いに教え合うことを、活動の中身とし、子ども達と共に事前に準備をしてから、明確な目的の下に、交流をおこなう。実施後は、感想を交流したり、自分の活動を振り返ったりすることを通して、お互いの「違い」と「共通性」を確認しながら、成就感を味わえるようにする。

この活動を繰り返し行うことにより、子どもたちが「メキシコ人」ではなく、日本人の友達と同じように友達として、親しみをもって接することができるようにしていきたい。

③手立て

i 交流への目的意識の向上に関して

- ・明確な目的の提示

「フランス校の1年生と友達になろう」「友だちの名前をおぼえ、自分の名前もおぼえてもらおう」という目的をつねに念頭に置いて計画を進めた。

- ・生活科の活動との関連

生活科で行った昔遊び、手作りおもちゃ遊びの発展的な実践として交流の場を利用した。

- ・教師主体から児童主体へ

1回目の交流は、教師主体で話し合いを進め、当日の進行も教師が行ったが、2回目は児童を3～5名のグループに分け、子どもたちが小グループでの話し合いをもとに計画を立て交流の準備を行う活動を多く確保した。

- ・交流の感想の紹介

フランス校の交流の感想を日本人学校の子どもたちに伝えた。

ii 日本人学校の児童とフランス校の児のペア活動に関して。

- ・自己紹介カードの作成と掲示（フランス校の児童に書いてもらったカードを日本人学校に掲示し、フランス校にも日本人学校の児童の物の掲示を依頼した。）

- ・協同的な活動により、教える、世話をする場と、協力する場の設定

（1回目）折り紙作り、（2回目）お祭りでの遊びと店番

iii コミュニケーションに関して

- ・自己紹介カードの和訳と西訳

自分の自己紹介カードをスペイン語で書き、フランス校のカードに日本語訳を加えて事前に情報交換をした。

- ・使いそうなスペイン語の練習や補助プリントの用意

メキシコタイムとの関連により、交流で使いそうなスペイン語を事前に練習した。

- ・スペイン語による説明体験

自分たちが考えた遊びのルールを一人一人がフランス校の子どもたちの前で発表できるようにした。

④経過

i 1回目の交流

【1回目の交流の概要】

- ・挨拶と自己紹介, 名札(メダル)交換
- ・フルーツバスケット
- ・ペアによる新聞紙兜作り
- ・挨拶と見送り



1回目の交流の様子

【1回目の交流後の児童の感想】

I わたしのペアはイレインでした。イレインちゃんはとても楽しそうでした。特に楽しかったのはカブトだと思います。よろこんでくれて、とてもうれしかったです。

U 今日さいしょは自分で名前を呼べなかったけど、最後はちゃんとバイバイとか、また会おうねって言えたからよかったです。

E 最初は緊張したけど、どんどん楽しくなって、最後は手もつなげたので、すごくうれしかったです。

K フランススのペアの友達アナちゃん、初めは緊張したけど、だんだん仲良くなってきた。兜の作り方がわからないときは、折ってあげたりしました。ドクロが上手と言われてうれしかった。

N ぼくの友達ディアナです。はじめはどうかかなと思ったけど、最後はこういう子なんだと思いました。カブトを教えるのにあまり時間がかからなくて、折り紙みたいなのが好きなのかなと思いました。

H シャロンと握手ができて良かった。はじめは話しかけられなかったけど、だんだん話しかけられて、友達になれた。

M 最初はあまり話しかけることが、むずかしかったけど、自己紹介をした後はたくさん話しかけられるようになりました。

(交流で難しかったこと) スペイン語(6名) 折り紙の折り方を説明すること。

(解決法) スペイン語をもっと勉強する(5名) もっと教えてなれる(1名) わからない(1名)

ii 2回目の交流(手作りあそびランド:屋台方式のお祭り)

【2回目の交流の概要】

- ・挨拶, ペアによる自己紹介
- ・屋台方式でのお祭り(ペアによる店番や出店遊び周り)
- ・挨拶と見送り



生活科のお祭りでの出店の店番をフランス校児童とペアで協力しながら行った。出店めぐりもペアで回った。

【2回目の交流後の児童の感想】

I ペアの子はとても楽しそうでした。またペアの子と遊びたいです。

U ペアの子はとくに迷路に行きたいと言っていました。わたしもよくに迷路に行っていました。

E ペアの子と楽しく遊べてうれしかった。ペアの子といっしょに行けたから。

K ボーリングで300点をとったらすごいって言ってくれた。

H 迷路が楽しそうだった。いろいろ準備が大変だったけど、本番は上手にできてうれしかった。二人とも楽しいと言ってくれた。ペアの子と遊べてうれしかった。

(交流で難しかったこと) 二人ともどっちかがあっちにいたりするから大変だった。

(解決法) もっと仲良くする。

M 友達が、僕がやりたいものを当ててくれた。みんながやっている店番を楽しいと言ってくれた。

交流でむずかしかったことは、うまく言う事を聞いてくれないこと。どうしたら良いかわかりません。

⑤各交流後の児童の感想やアンケートからわかったこと

1回目はペアの子の名前を書き、その子の内面や様子について記述していたが、2回目は「ペアの子」と書くだけであるとともに、その子の内面などにふれる記述が少なかった。

「交流の難しさ」に関しては、1回目の交流は、落ち着いてじっくり交流する時間があったこと。また日本人学校の子が兜作りを教えるという内容だったので、子どもたちはスペイン語のコミュニケーションに関する難しさを感じたようである。

2回目は一緒にお祭りを回るといふ活動とお店番だったので、比較的フランスの子も自由に行動できたこと、また日本人学校の子も子どもたちがお店番の方法についてなど積極的に気配りや声掛けをしなけりなかつたことなどから、「うまく言う事を聞いてくれない」などの難しさを感じたのであろう。



遊びのルールをスペイン語で書く児童



フランス校児童とペアで店番を行った



交流後の記念撮影

【児童のアンケート結果】

	全然できなかった	あまりできなかった	まあまあできた	とてもよくできた
たのしんでできた	0	1	1	5
			1	6
助け合ってできた	0	1	1	5
	0	0	2	5
仲良くなる工夫ができた	0	1	2	4
	0	4	0	3
もっと仲良くなりたい	0	0	1	6
			2	5

※上段が1回目、下段が2回目の交流

1回目は、教師が進行を進めながらの交流であったが、ペアの子とじっくりと取り組む時間があり、助け合ったり、仲良くなるための工夫をしたりすることができたようである。

2回目は、児童が中心となって計画や準備も含め交流を進めたので、充実感や達成感があったが、店番をするのが大変だったり、遊びの内容からも、じっくり交流する時間がもてなかったりしたため、助け合ったり、仲良くなるための工夫をしたりすることができなかつたようである。ペアへの相手意識に関しては、1回目の交流では、ペアの子の名前を覚えたり、メダルを作ったりと、明確な相手意識をもって交流の準備を進めることができた。

2回目は1回目と交流学級が変わってしまったこと、また急遽フランス校1年生から2年生に変更になったため、用意していた自己紹介カードや名札などの事前準備が利用できなかったこと、さらに大きかったのは子どもたちの相手意識がペアの子ではなく、お祭りに来る複数のお客さんに向けてしまったこと、などから「仲良くなる工夫ができた」に関して「あまりできなかった」と答える子の数が多くなったのであろう。

【4】考察

児童生徒の中には、メキシコ人や現地校の児童生徒に対してマイナスな印象をもっている子がいる。実際に日々の生活の中では、日本では見ることのない光景に嫌悪感を抱いたり、現地校の生徒にからかわれて嫌な思いをしたりする場面もあるようだ。そうした経験から、小規模校で落ち着いた雰囲気日本人学校、そして物に溢れ、環境が整備されている日本と比較し、メキシコ人に対して偏見をもってしまうことも理解できることである。

しかし、海外での生活を通して、様々な観光地や文化の魅力を味わいながらも、そこに住んでいる人に対しては逆に偏見を抱いてしまうことは悲しい事である。

日本人学校で効果的な交流を行うために必要なことは、個々の交流を繰り返すことである。更に交流後は振り返りをしっかりと行い、心の変化を自覚する場面を設けることである。上記の交流は、共に1回目の交流では楽しさを感じ、2回目の交流では難しさを感じている子が多かった。しかし、相手意識を明確にした交流によってマイナスの印象を抱いていた児童生徒も、国籍に関係なく相手を思いやる心が働くことも事実である。やはり、ペアによる交流を繰り返すことは、メキシコで暮らす子どもたちを尊重し、子どもたちの進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を向上させるのに効果があることが分かった。

国際性の育成には、コミュニケーション能力や見聞の広さと同様に、相手を理解しようとする心、積極的に関わろうとする意欲を育成することが大切であると感じた。

2 メキシコの食文化との触れ合いについて

～総合的な学習の時間での取り組み～

【1】テーマ

小学部3・4年生『アグアス博士になろう』～地域や身近なものに目を向けて～

【2】目標

- ①アグアスに関心を持ち、課題を見付け意欲的に調べようとする。
- ②身近にある食べ物について調べることを通して、異文化を理解することができる。
- ③生活の中で、アグアスにあるものや身近な食べ物などについて探究心を持つことができる。

【3】指導過程

(1学期)

①メキシコの果物を試食し、たくさんの食べ物があることに気づかせた。

果物を見るポイントを考え、「色」「形」「大きさ」「におい」「味」などの視点を持って観察しワークシートに気づきを記入していった。

手触りを確かめる、においを嗅ぐなど様々な方法で興味津々に観察する様子が見られた。

～授業の感想より～

- ・今日の授業で全く知らなかった食べ物のことを知れてうれしかった。
- ・まだまだわからないことがたくさんあるので調べたいです。
- ・こんどスーパーでさがしてみようと思います。

②前時の感想の交流をさせ、その後、各グループでこれから調べたいことや、やってみたいことを話し合わせた。話し合った内容を発表させ、全体で共有した。

- ・名前を知りたい。
- ・育てている所を知りたい。
- ・どの地方でとれるか。
- ・木からなるのか地面にうまっているのか。
- ・売っているところを知りたい。
- ・食べ方を知りたい。
- ・たねの中身を知りたい。
- ・スーパーに行きたい。

③ 買い物調べをし、家で使っている食材について調べ、グループごとに表やグラフにまとめ、交流した。

買い物調べの結果を各グループで真っ白の紙に自由な形式でまとめさせた。グラフにしてわかりやすく表すなど、算数で習得した技能を活かして、自分たちで考え、どのグループも試行錯誤しながら工夫をこらし、よいまとめ方をしていた。その活動の様子は非常に生き生きとしていた。また、最後に全体で交流し学習を深めていた。

(2学期)

④ スーパーマーケットを見学し、どのような野菜や果物が扱われているかを調べた。

スーパーマーケットにどんな野菜や果物が売られているか調べさせた。名前と気づきを書き、知らない食べ物については写真を撮り記録させた。全ての野菜と果物が確認できたらグループごとのめあてに基づき、調査をさせた。

⑤ スーパーマーケットで見つけた野菜や果物を知っていたもの。知らなかったものに分けた。

スーパーマーケットで撮った写真に名前を書き込み、それらを知っていたもの、知らなかったものに分類させた。その後、気付いたことを発表させた。その結果、知らない野菜・果物が27種類、知っている野菜がその倍あることがわかった。

⑥ 知らなかった野菜や果物を実際に食べたり、調味料をつけて食べたりしてみた。

知らなかった野菜や果物の中から六つを選択し、試食を行った。試食したら「おいしい」「おいしくない」にシールを貼り、気づいたことを記入するようにした。

～感想より～

- ・初めて食べてみたが、どういうふうに食べるのかが分かってよかったです。もっとたくさんの食べ方も調べてみたいです。
- ・フロール・デ・カラバサは、あたためるとあまりおいしくなかったのはなぜかなと思った。
- ・生で食べたらおいしくなかったけど、しょうゆをつけるとおいしかったものもあった。

⑦ メキシコの野菜や果物を使って創作料理をする。

前時の上記のような感想から、子どもたちが食べ方、調理法についての興味が広がったことがわかったため、前回の授業で食したヒカマ、チャヨーテ、フロール・デ・カラバサを使い、オリジナル料理を考えてコンテストをすることにした。また、コンテストで選ばれた2つの料理を実際に作る予定であることも同時に伝えた。

i 料理名 ii 材料 iii 完成図

④味付けをペアで考えさせ、自由な形式でまとめた。

料理方法などについては次回までに、おうちの方にもヒントをもらうこと、次回はまとめの続きとコンテストを行うことを確認した。

⑤それぞれのペアが考えた料理のコンテストを行う。

多くのメニューが発表された中、フロール・デ・カラバサの炊き込みご飯、チャヨーテのみそ汁が1位となり、実際にみんなで調理をした。



チャヨーテを調理する児童

⑥ 調理した料理をメキシコ人に味わってもらい感想を聞く。

近隣にある食堂の店主、隣のフランス校の教職員、日本人学校に勤務するメキシコ人など多くの人に試食をしてもらい、アンケートを行ったところ、味付けは良かったが、味が薄いと言う感想を多くもらうことができた。

⑦ メキシコ人はどのようにその食材を調理しているのかを探るため、料理学校に行き、見学で見つけた野菜などの調理法をインタビューする。



現地の調理学校での実習

⑧実際にメキシコ人に教わりながら調理して食べてみた。

チャヨーテのポタージュスープ、フロール・デ・カラバサのケサディージャなどをメキシコ人の先生に教わりながら調理し、食べた。

⑨日本で食べている料理とメキシコ料理との相違点を見つける。

日本で多く食べられているメニューと自分たちが調べたメキシコ料理の食材を比較し、共通点と相違点を見つけた。日本の米とメキシコのとうもろこしの主食の違いから世界各国の主食という新たな課題を見つけた。

⑩世界の日本人学校に問い合わせ、各地の主食についての情報を収集し世界地図にまとめた。

(3 学期)

⑪ 学習発表会に向けて、これまで調べてきたことについてまとめる。

【4】成果

①導入時やスーパーマーケット見学後に行った野菜と果物の観察や試食など、具体物に触れる活動を通して、学んだことを家庭生活で生かしたり、自分の考えを導き出したりできるようになった。また、「もっと違う野菜や果物も試してみたい」「家でも食べてみたい」などの意見が出され、意欲的に調べようとする態度やメキシコの野菜や果物への関心を高めることができた。

児童のコメント

「見学に行く前に、M君が『食べたものを見つけた』と言っていたので、わたしも探してみたらあって、自分も見学に行く前に見つけられてうれしいです。そういう楽しみがあるから総合は楽しいです」

②買い物調べやスーパーマーケット見学などを通して新たな発見をするだけでなく、自分の生活を振り返る機会にもなった。

児童のコメント

「普通にスーパーマーケットに買い物に行くと、知っている物しか見ないけど、勉強で行くとたくさん知らないものがあった。とても知らないものが多いとすごいと思った」

③調査結果の集計やまとめの活動を通して算数や理科で習得した技能を活用することができた。また結果を交流することを通して考えを深めることができた。

④問題解決学習を短いサイクルで実施することにより、子どもたちの関心が高まるだけでなく、子どもたちの生活にも変化が見られるようになった。

児童のコメント

「野菜と果物はこの勉強のお陰で好きになってきました。今まで嫌いだったレタスも食べられるようになってうれしいです。総合は色々な活動をして、色々調べたりして、何だかわくわくしました」

【5】考察

メキシコで総合的な学習を行うことについて、安全や言葉の問題もあり、十分な活動を行うために苦勞することもあった。しかし、メキシコの豊かな風土や文化は大変魅力的で学習を進めていくうちに、その野菜や料理の奥深さに子ども達は夢中になっていった。身近にある食材に始まった学習も終盤では、世界の日本人学校へのアンケート調査を行う広がりを見せ、子どもたちの興味や関心が次々と変化していった。また事後のアンケートで14人中12人が総合的な学習について「とても楽しかった」と回答し、残りの2名も「楽しかった」と回答したことから、子どもたちは探究的に学習を進めることの楽しさを感じることができたと思う。

3 まとめ

広い視野をもち、異文化を理解し尊重するとともに、異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力、そして、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる能力は、国際感覚豊かな人材として身につけておきたい重要な能力である。

日本を離れ、メキシコで生活するという誰しもが味わうことができない環境にいながらも、そういった能力を育む場所や機会を十分に得られないことは、とても残念である。反対に、それが日本国内であっても、国際感覚を身につけた人材を育成するために、自分が暮らす地域の文化やそこで暮らす人々との触れ合う場や機会を設ける必要がある。そして身近でありながらも自分たちが触れることがあまりなかった人の考えや文化について考えさせることで、国際感覚の礎を培うことも可能なのではないだろうかと感じた。

我々教師は、どのような環境であろうと、その地域で暮らす子どもたちに、国際理解を視野においた様々な機会や場を意図的に用意する必要がある。そして、子どもたちが感じたことをもとに、探究的に学習を進められるよう指導・支援をしていく必要があることを、この3年間の在外教育施設での勤務で学んだ。